

尚友俱樂部史料調査室・小林和幸編

## 『幸俱樂部沿革日誌』

(尚友ブックレット 26)

芙蓉書房出版 二〇一三・一二刊  
A5 二〇一頁 一三〇〇円

本書は、近代日本の貴族院関係の貴重資料を多数翻刻している、尚友ブックレットシリーズ第二六巻にあたる。

内容としては、「幸俱樂部沿革日誌」、「幸俱樂部小史」、「研究会小史」、三つの史料を載せ、最後に小林和幸氏による解題を付す。「幸俱樂部沿革日誌」と「幸俱樂部小史」は、尚友俱樂部所蔵の「小林次郎関係資料」所収のものを採録したという。「幸俱樂部小史」の作成者は、貴族院事務局に長く勤めた花房崎太郎であり、「幸俱樂部沿革日誌」の作成者については不詳とされるが、小林氏の解題によれば、花房が関与していたものと推定されている。「幸俱樂部小史」では、幸俱樂部創設の様子や、幸俱樂部所属の各派が創設されたさまが記述されている。「研究会小史」もまた尚友俱樂部所蔵のものであり、研究会に所属していた貴族院議員鍋島直虎によって書かれた。その内容は、研究会創設期の描写が中心となっている。「幸俱樂部小史」と「研究会小史」は、「幸俱樂部沿革日誌」の参考資料としての役割が強いため、本稿では「幸俱樂部沿革日誌」を中心に紹介したいと考える。

「幸俱樂部沿革日誌」は、明治三十二年から昭和元年までの幸

俱樂部の活動を記したもので、幸俱樂部の日常的な活動を明らかにするうえで貴重な史料だと言えよう。予算案や法律案のほか、政治状況について当局者の説明を求める様子が描かれる。入会・退会・死亡といった会員の異動や、幹事・評議員等の役員人事についても言及がある。毎月十一日の例会、毎月二十五日の午餐会、年末の総会の様子なども描かれ、興味深い。これら定例の会合については一貫して記述されている。

以上のような、日常活動を離れた記述においても注目すべきものは多い。例えば、大正十四年三月の普通選挙法案通過に関する部分が含まれる。明治四十四年、貴族院で普通選挙法案が否決されたことについての回想部分では、「当時全く夢想たも為さりし所なり。是れ全く時勢の変化とは言ひながら転た感慨に堪へざるものあり」と記される。明治四十四年の普通選挙法案否決という事件について作成者は、「幸俱樂部を主導者として」いたとみており、大正十四年の普通選挙法案可決には格別の思いがあったと推測される。日誌の記述は事実を淡々と記しているものが多いが、ところどころ作成者の主観が表れる部分もあり、ここに採り上げた、普通選挙法案についての記述もその一つと言えるだろう。

そのほか、大正十一年に起きた公正会の内紛に伴う幸俱樂部の動揺報道についても、作成者の考えが見え隠れしており、興味深い。幸俱樂部が動揺しているとの報道について作成者は、「幸俱樂部も其余波を被り衰退の傾向あるやに誤信せられたるも、会員の出入も少く其実際は殆んど影響する所なかりし」と記す。明治十四年の項に、「貴族院の大勢を制するものは幸俱樂部員にして、

貴族院をして政党政派に偏せず超然其面目を發揮せしめたるは実に此の当時なりしなり」と記した作成者は、幸俱樂部の衰退を直視出来なかつたのだろうか。日誌は、その四年後の大正天皇崩御を以て、幕を閉じている。

(石野夏幹)